

待降節第2主日礼拝説教「クリスマスを迎える装いを」

日本基督教団石神井教会 2016年12月4日

【旧約聖書日課】イザヤ書 59章12～20節

- 12 御前に、わたしたちの背きの罪は重く、わたしたち自身の罪が不利な証言をする。
背きの罪はわたしたちと共にあり、わたしたちは自分の咎を知っている。
- 13 主に対して偽り背き、わたしたちの神から離れ去り、虐げと裏切りを謀り
偽りの言葉を心に抱き、また、つぶやく。
- 14 こうして、正義は退き、恵みの業は遠くに立つ。
まことは広場でよるめき、正しいことは通ることもできない。
- 15 まことは失われ、悪を避ける者も奪い去られる。
主は正義の行われていないことを見られた。それは主の御目に悪と映った。
- 16 主は人ひとりいないのを見、執り成す人がいないのを驚かれた。
主の救いは主の御腕により、主を支えるのは主の恵みの御業。
- 17 主は恵みの御業を鎧としてまとい、救いを兜としてかぶり、報復を衣としてまとい
熱情を上着として身を包まれた。
- 18 主は人の業に従って報い、刃向かう者の仇に憤りを表し
敵に報い、島々に報いを返される。
- 19 西では主の御名を畏れ、東では主の栄光を畏れる。
主は激しい流れのように臨み、主の霊がその上を吹く。
- 20 主は贖う者として、シオンに来られる。
ヤコブのうちの罪を悔いる者のもとに来ると、主は言われる。
- 21 これは、わたしが彼らと結ぶ契約であると、主は言われる。
あなたの上にあるわたしの霊、あなたの口においたわたしの言葉は
あなたの口からも、あなたの子孫の口からも、あなたの子孫の子孫の口からも
今も、そしてとこしえに、離れることはない、と主は言われる。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 16章25～27節

25 神は、わたしの福音すなわちイエス・キリストについての宣教によって、あなたがたを強めることができになります。この福音は、世々にわたって隠されていた、秘められた計画を啓示するものです。26 その計画は今や現されて、永遠の神の命令のままに、預言者たちの書き物を通して、信仰による従順に導くため、すべての異邦人に知られるようになりました。27 この知恵ある唯一の神に、イエス・キリストを通して栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

【福音書日課】マタイによる福音書 13章53～58節

53 イエスはこれらのたとえを語り終えると、そこを去り、54 故郷にお帰りになった。会堂で教えておられると、人々は驚いて言った。「この人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろう。55 この人は大工の息子ではないか。母親はマリアといい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。56 姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか。この人はこんなことをすべて、いったいどこから得たのだろう。」57 このように、人々はイエスにつまずいた。イエスは、「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」と言い、58 人々が不信仰だったので、そこではあまり奇跡をなさらなかった。

なつかしのクリスマス…

先主日の午後、わたしたちは、この礼拝堂で、10月に病床で洗礼を受けられた一人の方の葬送式を執り行いました。洗礼を受けられる前も、受けられた後も、この礼拝堂でわたしたちと共に礼拝にあずかることはなかった方でしたから、教会の皆さんがそろって参列くださるといふことにはなりませんでしたが、長年、地域の医療に尽くしてこられた方でしたので、たくさんの地域の方々のご参列くださいました。1階にも席を設けましたが、受付の集計ではおそらく260名ほどが参列くださったのではないかとの報告をいただきました。前週のオープンチャーチに続いて、わたしたちは、図らずも、この場所に、普段おいでになられることの無かった多くの方々をお迎えすることになったのです。

先主日は、待降節（アドヴェント）の最初の日でしたから、教会堂にはすでにあちらこちら、クリスマスを迎えるための装いが施されていました。わたしどもはこの教会で始めて迎えるアドヴェント・クリスマスですから、例年どのような装飾がなされているのか分からず、おそろおそろ、最小限のものだけを取り出し、用意しただけでしたが、それでも、その装いは、葬送式に参列くださった多くの方々の目に留まったのではないのでしょうか。アドヴェントのリースや、クリスマスツリー、そして聖壇にはアドヴェントのキャンドル。およそ、葬儀のために建てられた斎場ではあり得ないような装いです。

葬送式で送られたK兄は、この教会においてになられたことはなかったということでしたが、中学生時代を青森・弘前市のキリスト教学校で過ごされ、そこで信仰を与えられていらっしゃる方でした。そのころは、日曜日になれば青森の教会に出席されていたのかもしれない。60年以上前のことですが、そのころのキリスト教学校や教会でも、クリスマスは特別なときとして迎えられていたことでしょう。わたしどもが前任地で懇意にしていた隠退牧師は、初任地が青森・弘前教会という方でしたが、「当時、待降節に入るとほぼ連日のようにクリスマスの集會・礼拝があつて本当に大変だった」ということをおっしゃっていました。最近では、どこの教会でも、クリスマスばかりでなく、むしろイースターなどをしっかり祝うことを大切にする傾向にありますから、必ずしもクリスマスばかりが特別な期節ではないかもしれません。けれども、当時は、それほど、クリスマスを迎えることは特別なことだったのでしょう。葬送の式を執り行わせていただきながら、わたしは、K兄もそのようなクリスマスを迎える装いの中を過ごされたことがあつたのだろうと、想像させていただいていたのです。

今日は、アドヴェント・キャンドルの二本目のロウソクに火が点りました。アドヴェント・キャンドルの習慣は、それほど古いものではありません。もしかすると60年前の日本の教会では、あまり一般的ではなかったかもしれない。そもそも、このアドヴェント・キャンドルの習慣は、ドイツなどの家庭で始められたもので、礼拝堂にまで飾られるようになったのは、ごく最近のことです。それでも、近年は、プロテスタントやカトリックの教会ではどこの教会でもアドヴェント・クリスマスの期節の礼拝堂に不可欠のものとなりました。

ある人たちは、このロウソクの一本ずつに、特別な意味を込めて火を灯すようになりました。もっともよく知られているのは、4本のロウソクを順に、希望、平和、喜び、愛、の名で呼ぶというものです。二番目と四番目が入れ替わることもあるようです。これをさらに、それぞれアドヴェント・クリスマスに記念する出来事に結びつけて、「預言者のロウソク」「天使のロウソク」「羊飼いのロウソク」「ベツレヘムのロウソク」と呼ぶこともある。わたしたちがクリスマスを迎える備えとして思い起こすべき出来事を、4本のロウソクに託しているのです。

このような新しい習慣に、戸惑われる方もあるかもしれません。実際、昔から慣れ親しんだクリスマスの迎え方が、皆さんにはそれぞれ、あることでしょう。その習慣は、中には幼少の時、青年時代に刻み込まれたクリスマスの記憶と深く結びついていることもある。いわば「なつかしのクリスマス」が、皆さんの中にある。それを、もしかすると壊してしまうことになるかもしれない。

けれども、わたしは、クリスマスには、ぜひ、固定観念を打ちこわして、むしろ、新しいクリスマスの祝いに向けた新しい歩みを進めていっていただきたいのです。何となれば、クリスマスを迎えるための期節を、わたしたちは、「アドヴェント」と呼ぶのです。「アドヴェンチャー」＝「冒険」です。新しい、未知のものとの出会いを求めて、あえて一歩踏み出すときなのです。知らなかった、新しいクリスマスを探す、冒険の旅を、この期節に、わたしたちは始めるのです。

忘れていたクリスマス…

今日の福音書には、主イエスが伝道・宣教の活動を始められた後に、故郷のナザレにお帰りになられたときの出来事が描かれています。主イエスは、そこで両親のもと、弟妹たちと共に育てられたのです。主イエスにとってもなつかしいものに満ちた町であつたでしょう。町を出ていった若者が、久しぶりに帰ってくれば、町中の者が、なつかしい思いで迎えたことでしょう。主イエスもまた、なつかしさに満ちたナザレの町、故郷に帰ってこられたのです。ところが、そのときは、「平和でなつかしさに満ちた」ひとときにはならなかった。町の人たちが知っている若者とは思えないことを、主イエスは教え始められたので、人々はびっくり仰天してしまった。主イエスの言動に驚かされて、なつかしさどころではなくなってしまう。そればかりか、反発まで起こってしまった。

「いったい、あいつは何様だ。奴はマリアの息子ではないか。ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダの兄貴ではないか。おれたちは、こいつが鼻垂れ小僧だったときから知っているぞ。そいつが、ふらっとこの町に帰ってきたと思ったら、何だ。何かおかしなことを言い始めやがって、おかげで、町中が変な雰囲気だ。おい、お前、おとなしくしてくれ。町の連中が心ざわつくようなことをしないでくれ。」

クリスマスを探す旅をしていくとき、わたしたちは無意識のうちに期待しているのは、あの「クリブ」と呼ばれる置物のような、飼い葉桶を中心とした家畜小屋のクリスマスかもしれません。子どもたちがページェント聖誕劇で演じてくれる、お決まりのクリスマス。そこにたどりつくことを期待している。

そのような期待をふくらませているわたしたちのもとに、突然、成人した 30 歳代の主イエスがおいでになられたならば…。そんな主イエスが、クリスマスを探す巡礼の旅路に、いつの間にか同道なさっていらしたら…。

「あなたは、ベツレヘムの飼い葉桶でお生まれの方、マリアから生まれた主イエスなのですね。けれども、今は、クリスマスです。わたしたちの期待している御子は、飼い葉桶の中におとなしく眠っている乳飲み子です。成人して、教える語る方のことは、クリスマスに期待していません。どうぞ、お引き取りください。」

そんな具合に、主イエスを追い返してしまっていないのでしょうか。本当は、そういう主イエスのこともよく知っているのに、クリスマスを探す旅の中では、忘れてしまっていたい。それは、また別の機会にしてもらいたい。クリスマスを探す旅でわたしたちがたどり着くのは、「なつかしのクリスマス」だけで十分、と。

けれども、わたしたちの大好きな「なつかしのクリスマス」の中にさえ、主イエスは、思いがけないお姿でおいでになるのかもしれないのです。

知らなかったクリスマス…

わたしたちは、クリスマスを探す冒険者。クリスマスを探す旅を続ける。この旅を続けるとき、わたしたちは、その旅路、冒険の道を先に進んだ先達に目を向け、歩み方を学ぶことができる。旧約の預言者たちは、そのような先達でしょう。

預言者イザヤは、わたしたちのよく知っているクリスマスばかりを、心に思い描いていたわけではなかったようです。イザヤが旅人としてゴールに思い描いていたのは、「飼い葉桶に寝かせられた乳飲み子」ばかりではなかった。イザヤは、今日の御言葉にあるように、「鎧をまとい、兜をかぶり、戦う者の衣と上着に身を包んだ、力強いお方」を、旅のゴールに思い描いたことがあったのではないのでしょうか。あるいは、別の箇所で告げているように、「見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない」(イザ 53:2)、傷だらけの弱々しい姿を、思い描いていたこともあったのではないのでしょうか。

わたしたちは、クリスマスを探す冒険の旅を続けます。この冒険の旅の道標には、「なつかしのクリスマス」が置かれているかもしれません。「忘れていたクリスマス」も置かれているかもしれません。わたしたちは、そこで、ひととき、冒険の旅を休ませてもよいでしょう。けれども、わたしたちは、道標を確かめたならば、冒険の旅を先に進めましょう。まだ見ぬゴールを目指して、まだ本当には見ていない、新しい「クリスマス」の出来事、**恵みの御業**を見ることを目指して、冒険の旅路、アドヴェントの道を進み行きましょう。

この道の先に、わたしたちの行くべきところがあります。帰るべきところがあります。そこに、わたしたちがすでに知っている「クリスマス」よりも、はるかにまさる「クリスマス」を、期待してよいのです。アドヴェントの灯火は、なつかしさを慕い求めるわたしたちに、本当に慕うべき、帰るべきクリスマスを見いだす道を指し示してくれるでしょう。そのゴールにあるものを分かち合えるのは、共にこの冒険の危険を冒して歩んだ者たちの群れだけなのです。